

五十字劇評NO.72

言わせて!

今日の芝居

劇団文化座 母

〔50代〕

▼暗いかと思っていたが、家族の明るさに見えていてそれほど辛くは感じなかった。ただ、現代と過去の語り部分で時代の流れ部分で少し混乱しそつになつた。(女性)

▼佐々木愛さんのお芝居良かったです。原作も読んでみよつかと思いましたが。(女性)

〔60代〕

▼多喜二の悲惨な死に対して、三浦綾子さんのキリスト教的救いの思いが感じられて秀逸な舞台だった。一方、愛さんの画一的な老婆の演技に予定調和の打算を感じた。(男性)

▼母が居た。廻り舞台の転換の中、多喜二の存在が温かな家族愛で浮き

彫りとなり、現在の空気につながる恐怖よ。(女性)

▼佐々木愛さんの発する声は明るく暖かくも確実にセリフを重ね伝えてくれました。息子のこころを語る時、語尾に「…なの」というセリフは傍らにいつも息子がいるように感じられた。愛さんの小林セキとしての秋田訛りのあるセリフまた聴きたい。パンフレットにあつた演出家・鴻山仁さんの文章の一部を以下に紹介します。

……今回、稽古に立ち会つていて、何度が襲つてくる感情だが、現実にはここにいないはずの存在、とりわけ死者をもよみがえらせる芝居の魔力に、改めて触れたような気がするのだ。略……そのための語り、そのための言葉、そのための身体。演劇の呪術力、交換力を鍛えなおすことが、今、僕らに求められている。これを読み俳優さんのみならず観る側もそれを課題としたいです。(女性)

▼「事務局だより」に前例会比39名増とある。これは一面トップの大一ユースではないか。にわかには信じられない数字である。昔、労働運動に傾倒したのは、自分のためだった。

多喜二は全てを投げ打つて、官憲と戦った。右傾化を危惧する昨今、ただ、傍観している無力さを感じた。「壱十船」を読まねばならない。(男性)

〔70代〕

▼多喜二の母が、我々の心に刻むように語る家族の温かさ。大義名分で虐殺行為を行った特高は神の裁きを受けたのか。(女性)

▼回想のセリフと回想の場面が渾然一体となり、セキと多喜二が並んで夕映えを眺めるラストがすべてを語っていた。(男性)

▼今回の芝居は期待にたがわず、人間の心の内をしつとりと、そして楽しく、心より喜びの賛歌を唱いあげて下さつたと思います。私達に、この様に芝居を観ることの出来る、平和な時代を築いてゆくことを託されていると、改めて考えさせられました。

▼脚本や本を読んでいる時に愛さんの姿が浮かび楽しみにしていました。が舞台の愛さんはその何倍も感動をあたえてくれました。担当してよかったです。これからも芝居をみつづけてい！(女性)



「70代」

▼母親セキの佐々木愛さんがステキだった。貧しく苦しい生活でも、明るく楽しい家庭で、学識がなくとも人間として大事な事を知っている母だった。優秀でやさしい息子多喜二が軍国主義の国に殺されどんなに悲しいか、これからの日本ではくり返してほしくない時代だ。(女性)

▼「佐々木愛」最後の主演作品であるというがまだまだ主演は出来るよ！文化座が一丸となって舞台を創りあげていることが伝わってくることに感激、感動でした。(男性)

▼映画や本などで見聞きした多喜二のイメージとだいぶ違って描かれていて、気分が重くならずいられます。でもこの表し方だとこの時代のこわさが半減されてしまうとも思いました。(記載なし)



▼女優佐々木愛さんの60周年を記念した舞台と聞き、私の心はウキウキ・ワクワクでした。あの優しい声・明るい声素敵な舞台でした。母セキは字が書けず読めない女性ですが何気ない言葉「私の家族は、男だからとか女だからとかは無く皆一緒だ」逃げてきた人を助けた話など、とにかく小林家は明るく楽しい一家を観て、小林多喜二の蟹工船などの本を書いた心情が少し分かった気がしました。(女性)

▼お芝居は期待通りで、運営担当サークル会議も深くて濃くて明るくて楽しんで取り組めました。931人万才！(男女記載なし)

「80代」

たのしくやさしくてうれしいです。(男女記載なし)

「年代・性別記入なし」

▼セキのおおらかで明るく、どんな時でも多喜二たち家族の背中を押ししてくれる人柄がとても魅力的。多喜二の遺体を前に、泣き叫ぶでもなく語りかける姿に、胸が張り裂けそつだった。



編集スタッフから

入会48名という画期的な会員増となった8月例会。その声かけはいつも「お芝居」を観ませんか、という抽象的なお誘いではなく、「三浦綾子の『母』を観ませんか」と作品をアピールする具体的なものでした。それだけ前評判の良かった舞台であったと言えます。

実際の『母』は期待に違わぬ舞台でした。『母』は過去に前進座の公演があり、近年は寺島しのぶ主演で映画化もされ、いずれも素晴らしい作品でした。文化座の作品は、三浦綾子の「許す愛」というテーマが息つき、本来の作家の思いが強く込められた舞台であったように思います。ラストで、亡くなった多喜二が母の後ろに立つシーンは、私には十字架に掛かったキリストのように見えました。感動的な作品をありがとうございました。